空間・社会・地理思想 10号 2-19頁, 2006年
Space, Society and Geographical Thought

ジオグラフィック・マトリックス・リローデッド
―模範例としての学会発表表題―

泉谷 洋平*

Yohei IZUMITANI
Geographic Matrix Reloaded:
titles of presentations as exemplars

キーワード：人文地理学，クーン，模範例，パラダイム，学会発表表題，地理行列

1．はじめに

地理学とは何か。

地理学をめぐる様々な問いの中で，これほど単純で漠然とした問いはおそらく他にない。本稿の目的は，クーンのパラダイム概念を足がかりにしつつ，人文地理学会の発表表題を事例にこの問いへとアプローチすることにあるが，まずは本稿でこうした問いに取り組む動機について簡単に述べておきたいと思う。

地理学とは何かという問いは，何の文脈もなくそのまま提示されればひどく漠然とした抽象的な問いである一方で，ほとんど全ての地理学者が日々具体的な研究実践の中で突きつけられている（そして場合によっては無意識のうちに対処している）問いでもある。他分野と競合するような状況で成果を公にする場合ならば，地理学者は多少なりとも「地理学らしさ」をアピールすることで差異化を図ろうとするだろうし，逆に学位論文や学術雑誌への投稿，学会で研究成果を発表する場合など，地理学の制度内部で研究を生産する場合は，同化の手段として「地理学らしさ」を強調することになるだろう。そして，ここでの「地理学らしさ」は，あくまで他分野から評価されたり論文が審査を通過したりするための手段なのであって，それ自体が目的なのではない。この場合，「地理学とは何か」という問いはいわば余計な問いであり，そこに拘ることは地理学の研究を進めていく上で必ずしも生産的ではない。事実多くの地理学者はそういった問いに拘る素振りを見せることもなく，日々研究に邁進しているのである。

しかし，では多くの地理学者はこの問いに拘る素振りを見せていないだけで，実は皆それぞれにこの問いに対して何かしら思うところがあるのかというと，必ずしもそうではない。地理学的であるような問い（多くの地理学の論文で扱われるような問い）には大いに関心を抱いていても，地理学そのものに対する問いへの関心は，現に，事実として，全く持ち合わせていないような地理学者も多く存在するのである。

実際のところいずれのタイプの地理学者が多いのか，あるいはこうした状況が望ましいのか望ましくないのか，という問題もそれなりに興味深いが，さしあたって筆者個人にとっての問題はそこにはない。地理学そのものをめぐる問いに対して少なくとも表面上無関心であるような集団において，そういった問いを集団内で取り扱いやすくするための公に認め

* フリー　geophil@venus.sannet.ne.jp
http://www.venus.sannet.ne.jp/geophil/

られた方法論が欠けているのは自明の理であろう。地理学的であるような問い同様に，地理学そのものに対する問いにも大いに関心のある筆者にとって真に問題だったのは，前者の問いとは異なって，後者の問いには，その問いを地理学の内部で有意義な問いとして立てる方法そのものが与えられていないということだったのである。

これから本稿が地理学それ自体をめぐって展開する議論は，地理学内では少なくとも表向き有意義とは見なされていない問いをめぐる筆者なりの試論の一環であると同時に，限りなく論文に近い形式（学術的な書き物）でこうした問いを提起する方法そのものを模索する試みでもある。そして，この作業は主として上述の状況に対する「満足できなさ」によって動機づけられたものでもある。言い換えれば，本稿を執筆する動機には，地理学の世界で有意味または無意味とされている事柄と，筆者自身が有意味または無意味と感じることとの間の，絶望的な断絶が関与している。したがって筆者は，その断絶を展望しつつ本稿の意義を既存の地理学の成果中に位置づけることができる立場にはいない，ということを予め断っておきたい[1]。

「地理学とは何か」という問いをめぐり展開される探求の営みは，大きく二つのタイプに分かれるように思われる。一つは，何らかの意味で地理学に固有と考えられる鍵概念を同定しようとする営みである。これまでのアカデミックな地理学の歴史において，地域（region）という概念から空間（space），場所（place）に至るまで，さまざまな概念が地理学にとって核となるものとして提出されてきた。こうした探求においては，先の「地理学とは何か」という問いに対して，それぞれの立場に応じて，「地理学とは地域（あるいは空間や場所）を中心的な概念とする学問である」という答えが用意されることになる。しかし，このような仕事の多くにとって最大の関心事であったのは，「地理学とは何か」という問いよりも，むしろ「地理学とは何であるべきか」という規範的な問いであったように思われる。地理学が個別性の追求ではなく一般的法則の追究に向かうべきだと考えた地理学者たちは，地域に対して空間をより重要な概念とみなしたし，そうした地理学に対してもっと社会的不平等の現実へ目を向けるべきであると考えた地理学者や，人間の地理認識の主観的側面に注目すべきだと考えた地理学者たちは，空間ではなく場所という概念を重視してきた。

これに対して，もう一つ別のアプローチが考えられる。このアプローチにおいては，地理学が何であるべきかという規範的な問いよりも，地理学が事実として何であるのかという問いが重視される。ここでは，地理学の中心的な概念や，規範的な思考の枠組みが先験的に与えられるのではなく，地理学が現に何をやっているかということの省察から，地理学の核にどのような概念や思考の枠組みがあるのかが経験的に導き出される。実はトマス・クーンがパラダイムという概念を導出する際に科学史の分野で採用したのはこれに近いアプローチであり，本稿が採用するのもこの立場である。つまり本稿では，地理学がどうあるべきかという問いをひとまず括弧に入れ，現実の地理学の着想にどのようなパターンが観察されるかに焦点を当て，そのことによって地理学がいったい何を中心的な思考の枠組みとしているのかを明らかにする[2]。

以降，まずII章では，クーンの科学論のうちこれまで人文地理学では十分に論じられてこなかった議論を整理する。特に，模範例としてのパラダイムというアイデアに焦点を当てる。次いでIII章では，地理学の中心的な思考の枠組みを明らかにするための具体的な題材として，学会の一般研究発表の表題を取り上げる。特に，これらがクーンの模範例という概念に相当すると考えた上で，そこにどのような傾向や特徴があるのかを明らかにする。さらにIV章では，人文地理学における認識の枠組み，つまりクーンの言う形而上学的パラダイムとしての地理行列が成立する契機について検討する。最後にV章で，残された課題にも触れつつ議論を締めくくる。

II　模範例としてのパラダイム

(1) クーン再考—模範例・科学者集団・通常科学

パラダイムという語をクーンが導入してからすでに40年以上が経過しているが，野家（1998: 10）が指摘するように，それは科学哲学の分野を越えてもはや日常語としてさえ利用されるようになっている。

パラダイムという概念が地理学に入り込んできたのは 30 年以上も前のことになるが，それは，クーンやポパーらが参加したシンポジウムの記録（ラカトシュ・マスグレーヴ 1985）が公刊されたのを機に，科学哲学の内部で「パラダイム」をめぐる論争が盛り上がっていく時期と重なっている。英語圏を中心に人文地理学においてクーンがどのように受容されてきたかについては，野澤（1992）が手際よくレビューしているので，ここでは触れない。代わりに，ここでは「パラダイム」という語の通俗的な理解をひとまず括弧に入れて，野澤（1992）によっては十分に掘り下げられていない論点を中心に議論を進めたい。

先述のシンポジウムにおいてクーンは，パラダイムという語が『科学革命の構造』の中できわめて多義的に用いられているという批判を浴びた（マスターマン 1985）。それよると，クーンが用いたパラダイムという語には，形而上学的な世界観（形而上学的パラダイム），専門家の共同体において一定期間モデルとなる問題や解決方法を与えるものと承認された科学的業績（社会学的パラダイム），具体的な科学の実践において問題解決の道具として利用される古典的著作や教科書，理論装置など（構成パラダイム）という，大別して三つの異なる用法があり，さらに詳しくみると 21 もの用法に細分されるという。この批判の正当性はクーンも直ちに認めることとなり，彼はその後，パラダイムという語に負わされた多様な意味を明確化するため，「専門母型（disciplinary matrix）」という語を導入した（クーン 1971: 206-213）。専門母型はさらにいくつかの下位概念により構成されているが，クーンは主なものとして，記号的一般化，モデル，価値，模範例（exemplars）の四つを挙げている（クーン 1971: 206-213）[3]。つまりクーンは，曖昧であると指摘されたパラダイムという語の用法を，別々の四つの概念に置き換え，それらの上位概念として専門母型という概念を提出し直したのである[4]。

クーンが元々パラダイムという言葉で意味していたのは，クーンが模範例と呼び直したもの，すなわち，それを通じてある科学分野での問題の立て方や解答の与え方が身につけられていくような，教科書や古典的著作，雑誌などの定期刊行物のことだった。この模範例という意味でのパラダイムが特定の研究者集団において機能していることを，クーンは当該の分野が科学として成立していることのメルクマールと考えたのである。そして，そのようなパラダイムを共有するグループは，「科学者共同体」または「科学者集団」と呼ばれている。つまり，クーンにおいては，模範例としてのパラダイムと科学者集団とは不可分の関係にある[5]。

われわれは，ある分野における模範的な問題の立て方や，その問題の解決の仕方を，具体的な実例を通じて学ぶ。そのような実例は，ある場合には教科書に記載された章末の練習問題であったり，あるいは実習や演習，実験において課される問題であったり，またある時には，学術誌に掲載されている論文などであったりする。模範例とはこうした実例のことに他ならないが，それは当該分野を専門にする科学者集団の内部で社会的に承認されている必要がある。ただし，承認とはいっても明示的な合意が必要なわけではない。ある科学者集団が具体的な実例を通じて模範的実践を身につけるプロセス自体が，まさにその実例をその分野における模範例として社会的に承認するプロセスにもなるのである。この時，それが当該分野の規範的な実例としてふさわしいかどうか，ということは暗黙の了解事項に属する。このような形で模範例としてのパラダイムが機能している状態は「通常科学（normal science）」と呼ばれる。通常科学の期間においては，模範例を通じて身に付けられた科学的問題の解決方法は，日常的なルーティン・ワークとして習慣化されている。通常科学期がまさに通常の期間としてある程度長期にわたって持続するのは，まさにそこで模範とされていることがルーティーン化して暗黙の習慣となってしまうことによる。

こうして，模範例と科学者集団，通常科学という概念は循環論法的な関係で結ばれることになる[6]。これら三つの概念によって輪郭を与えられた科学が，個人の営みの単純な総和ではなく，あくまで集団的・社会学的な現象であることは言うまでもない。この点を踏まえた上で科学的知識の生産や習得のプロセスを適切に理解するには，さらに以下の三点に留意しておくことが重要である。

まず一点目は，それらの習得は常に盲目的になさ

れているということである。われわれは模範例に接することを通じて，当該分野において規範的，典型的とされている実践のあり方，つまり「その分野らしさ」を学ぶことができる。だが，こうして習得された知識はポラニー（1980）の言う暗黙知の領域に属するものであり（クーン 1971: 218，野家 1998: 220），それを全て言語化し記述することはできない。クーン（1998: 400-413）は，このプロセスの具体例として，少年ジョニーが父親に教えられて，実際に実物に接しながらハクチョウとガチョウとアヒルの区別を学んでいく様子を描いている。ジョニーは，ハクチョウやガチョウ，アヒルとは何であるか，という定義や対応規則を教わるわけでなく，それらがないままに類似性や差異に関する知覚を反復学習する。ジョニーはハクチョウが何かと問われればそれなりに答えることができるかも知れないが，彼がハクチョウを区別しうるのは，ハクチョウが何であるかという問いに対する答えを彼が知っているからではない。クーンは，このような暗黙知的な認識の過程が，科学知識の修得にとっても重要な一側面をなしていると考えるのである[7]。

二点目は，数々の模範例を通じて習得される「その分野らしさ」は必ずしも一元化されない（むしろほとんどの場合一元化されない）ということである。さまざまな模範例への習熟を通じて身に付けられるさまざまな知識や技能の間に，「その分野らしさ」を表徴する共通のルールや定義が一元的に与えられるわけではない。模範例によって学習される知識は，それぞれの間に類似性を保持しながら直接的あるいは間接的につながっているのみであり，そのつながりの全体が当該の分野の大まかな輪郭を形成している。つまり，ある分野の「科学者の問題設定や解決の技法には『共通の本質』が存在するわけではなく，そこにはゆるやかな『家族的類似性』があるのみなのである」（野家 1998: 156）。そこでは，より「その分野らしい／らしくない」という相対的な区別はあっても，「何がその分野である／ない」という絶対的な区別はない。言い換えれば，その分野の中心／周辺の区別はあっても，内／外の境界は不明瞭なのである。

さらに三点目として，科学革命というアイデアの含意も，こうした「パラダイム＝模範例」という考え方の元で理解されなければならない。科学革命とは，あるパラダイムが機能している状態（すなわち通常科学）から，それとは全く別のパラダイムによって特徴づけられる通常科学への転換として定義される。ここで問題となるのは，模範例としてのパラダイムと形而上学的パラダイムとの関係であるが，ある通常科学期に支配的な形而上学的パラダイムとは，そこで通用している模範例への習熟を通じて獲得される知識や技術をメタレベルにおいて総体的に把握したものに他ならない（これに関しては，後に IV 章で詳述する）。パラダイム転換が形而上学的パラダイムの転換としても描きうるのは，むしろ模範とされる科学的業績や，ルーティーン化された模範的な問題解決方法が変化したことの帰結として生じる事態である。そして，先述のように模範例を通じて習得される知識が言語化しきれないという暗黙知的性質を持つ以上，それらの積分である形而上学的パラダイムがある革命的科学者の作為によって根本的転換をとげるということはありえない。それは常に意図せざる結果として生じるのである[8]。

(2) 人文地理学におけるパラダイム論の受容—批判的検討

ここまで解説したようなパラダイムの理解は人文地理学においてはこれまで全くと言っていいほど注目を浴びてこなかった。実際われわれ人文地理学者は，ほとんどの場合パラダイムという語をある集団・時代において支配的なものの見方，つまり形而上学的パラダイムとして理解してきたのである[9]。だが，ここまでの議論で明らかなように，クーンにとってパラダイムとは第一義的には「モノ」なのであって（クーン 1998: xx-xxi），それが実際に社会的に機能するのは，学術誌や学会で研究成果を公表する場面や教育の場面などである。こうしたことを念頭に置くと，従来の人文地理学におけるパラダイムをめぐる議論は，十分批判的に吟味されなければならない。

例えば，野澤（1992: 53）は，Mair（1986）を引用しつつ，「クーンを利用した地理学者には 2 つのグループがあり，一つは特定の位置（立場）を正当化したり，哲学的問題を主張するもの，第二は地理学史研究にクーンモデルを適用するものがある」

（原文ママ）と指摘する。この第一のものとは，計量革命時に自らの立場を新パラダイムとみなして旧パラダイムを批判した計量地理学者に代表される立場である。第二の立場としては，Johnston（1978）やジョンストン（1997，1999）などが挙げられる。それによれば，人文地理学には支配的な単一のパラダイムが無く，複数のパラダイムが存在しており，そもそも社会科学である人文地理学にはクーンの議論をそのまま適用することが困難であるという。

クーンを引き合いに出したこれらの議論は，端的にクーン読解としては不適切である。第一の場合においては，革命の主体として形而上学的パラダイムの転換（例外主義から論理実証主義へという転換）を意図的に遂行しようとしている論者たちによって，クーンが引き合いに出されている。しかし，少なくともクーンの議論は，新パラダイムの登場を合理的進歩でなく断絶を含んだ進化の過程とみなしており，パラダイム転換が積極的に目指されるべきであるとか意図的に遂行できるなどといった考えを含んではいない（クーン 1998: 284 参照）。計量地理学者達のクーンの引用は理論的・哲学的なものなどではなく，当時の単なる知的流行の域を出ていない。

第二の場合について言えば，「人文地理学に複数のパラダイムが存在する」というのは，無意味な命題であるか，あるいは事態を部分的にしか捉えていない。例えば，パラダイムを模範例と捉えるとするならば，人文地理学には複数のパラダイムが存在するという言明は真であるが，無意味であろう。というのは，科学の文脈において，実例がたった一つしかないような分野を想像することは，われわれには不可能だからである。また，パラダイムを形而上学的なそれとして理解する場合でも，人文地理学のパラダイムが複数存在するというのは事態の説明としては不十分である。「人文地理学には複数のパラダイムが存在する」という命題が有意味であるためには，その内部で複数か単一かが問題になるような「人文地理学」という枠が確定している必要があるからである。この枠組みを固定化せずに，その内部のパラダイムが複数か単一かを議論することには意味がないだろう。したがって，「人文地理学には複数のパラダイムが存在する」のであれば，別の意味で人文地理学のパラダイムは単一でなければならない。

同様にして，社会科学の諸分野においても，政治学や経済学，社会学などが一定のまとまりを持った学会を形成している以上，そこに（政治学，経済学，社会学などを名乗る）科学者集団の存在を，したがってパラダイムを認めないわけには行かない[10]。たとえその境界が曖昧でその内部が多様であるとしても，われわれはラッツェルやハーヴェイを経済学者と呼んだり，ブルデューやウォーラーステインを地理学者と呼んだりしない程度には，それらの差異を識別できているのである。

以上を念頭に置くならば，われわれはクーンを受けて，人文地理学は人文・社会科学であるがゆえにパラダイム論は適さないと結論づけるのではなく，（自然科学の分野ほど輪郭が明確でないにしても）われわれが比較的安定して人文地理学を人文地理学として認識することができるのはいかなるメカニズムによってか，と問わねばならない。つまり，われわれは何を模範例として「人文地理学らしいもの」と「人文地理学らしくないもの」を区別できるようになるのかということを検討しなければならない。その際，以下の二点に留意する必要がある。

まず，模範例という概念が科学者共同体という社会的な集団とセットの概念である以上，人文地理学の知的成果に国家や言語，民族その他に由来する境界線の影響が皆無であるかのような前提は採用できない。経験的に言っても，日本の人文地理学者のコミュニケーションや人的な交流の範囲は，その是非は措くとして，英語圏やその他の言語圏の人文地理学から相対的に独立しており，多くの場合は日本語の流通する範囲内で完結している。従って，日本の文脈に即して導き出された人文地理学の模範例＝パラダイムについての議論は，そのまま英語圏その他の人文地理学に適用されるものではないし，逆に英語圏の人文地理学における模範例＝パラダイムがそのまま日本の人文地理学において模範例として機能している保証もないのである。

次に，教育の場面においては，少なくとも日本の人文地理学では，自然科学と比べて教科書の重要性は相対的に低くなると思われる。他方で学術誌や学会の研究発表のような専門的知的生産物が模範例として果たす役割は，専門家のみならず学生や大学院生にとっても大きくなると推測される。とりわけ，

学会発表は多くの大学院生にとって専門的研究活動の成果を公表する最初の経験となるだけでなく，すでに専門家としての地位を確立した研究者にとっても個々の研究成果を最初に公表する機会となることが多い。したがって，学会発表の文脈から見いだされる模範例は日本の人文地理学の専門母型を構成する重要な要素であると考えられる。

次章では，こうした考えを踏まえつつ，日本の人文地理学の学会発表においてどのような模範例が見出されるかを検討することにする。

III　模範例としての学会発表表題 —「～における」と地名

(1) 日本の人文地理学における学会発表表題の位置づけ

日本の人文地理学の場合，学会発表は，ある研究を論文として公表するための準備段階と位置づけられている。また，成果の公表とその消費はほぼ同業者の内部で完結する。つまり，学会発表というのは，ある知識が「人文地理学の知識」として人文地理学の専門家に承認される最も初期の段階であると言える。もちろん，人文地理学の専門家が承認するといっても，学会誌の場合のように専門家の厳密な審査を経るわけではない。したがって，学会発表は，全体としては個々の人文地理学者が人文地理学の成果であると思っているものの集合であり，それが人文地理学の成果となるかどうかを最も大きく左右するのは，その成果の生産者であり発表者である学会員（＝人文地理学者）がそれを人文地理学とみなすかどうかという点である。

ここから，学会発表の表題について次のように言うことができる。すなわち，ある研究成果に特定の表題をつけて学会で口頭発表するということは，ある知識群がその生産者によって「人文地理学」の知識として認定を受ける最初の命名行為であると同時に，それらを人文地理学に所属するものとして同業者に認識してもらう最初の契機である，と。学会発表表題をこうした観点から捉えておくならば，人文地理学の模範例を検証する上で，学会発表表題を考察対象とすることには以下のような利点がある。

まず，学会発表・論文・報告書・単著を問わず，研究の内容そのものではなく表題のみに着目することで，内容を括弧に入れた上で大量の事例の形式的な側面に限定して論を進めることができる。形式的な側面に注目することで，議論の諸側面を数値によって可視的に把握することが容易となるだろう。もちろん，表題が研究成果に付された名前であるということは，それが単なる形式にとどまらないことをも意味する。多くの場合，発表にはその内容を適切に要約した表題が付されるからというだけではない。たとえ全ての表題がそうであるとは限らないとしても，われわれは無意識のうちに物事を内容ではなく名前や肩書きによって判断していることが多々あるし，逆に名前が実態を制約するということも大いにあり得るからである。したがって，表題の分析より得られる各種の数値情報は，研究活動の単なる形式的側面の要約以上の意味を持つ。

また，論文や著作の表題は考慮せずに学会発表のみに対象を絞ることによって，形式的な側面に潜む特徴や傾向がより検出されやすくなると考えられる。上述のように，学会発表は情報伝達の文脈がほとんど同業者との対面コミュニケーションに限定されている。学会発表表題には，こうした形式上の制約によって，「人文地理学らしさ」のメルクマールが研究成果の質や内容とは独立してより顕著に現れることが推測される。論文や単著の場合は，学会発表とは異なって，より広範囲で多様な文脈において受容される可能性が高く，そのことが形式上の多様性につながることが想像される。本章の目的は，日本の人文地理学に模範例が存在しないはずがないという前章の議論を踏まえた上で，その模範例の実態を分析することにあるので，その実態がより純粋な形で検出されると期待できる事例を検討する方が好ましい。

以上を踏まえて，これまでの人文地理学会大会の一般研究発表の表題を対象事例とし，そこにどのような特徴が見られるのかを確認していきたい。

(2) 模範例としての「～における」と地名

さて，筆者は本稿の冒頭で，かつて人文地理学では地域や空間，場所などといった言葉が学の根幹をなす中心的な概念として提出されてきたと指摘したが，これらの言葉は学会発表の表題においてどの程

度の頻度で登場するのだろうか。この三つの中では「地域」という語の登場頻度が2,107の表題[11]中396回と圧倒的に多く，118 回の「空間」がそれに続いており，「場所」はわずか24回である。だが，学会発表の表題で最も頻繁に使用される言葉はこれらのいずれでもない。その言葉とは，「（～に）おける」という語である。

「(～に）おける」という語が使用された表題は合計848であり，これは実に全発表の4割以上に達する（第1図)。この語は，その直前に来る語句とともに連体詞的に用いられる。そして，通常その直前に位置するのは，場所，時点，分野などを示す言葉である。つまり，「（～に）おける」という語は，その直前に来る言葉とともに，後続の語句（ほとんどの場合，名詞）をより限定された範囲に「位置づける」働きをするわけである。この作用を広い意味で空間的なものとみなすならば，（よく言われるように）人文地理学が空間的視点を持った学問である，ということの実態は，ある対象を「～における」という表現により何らかの形で「空間的に限定していく」点にあると考えられる。

こうした機能を果たしていると思われる表現は，他にもいくつかある。例えば，副題中に用いられる「～を（事）例に」,「～を（事）例として」,「～の（事）例」などの表現も，われわれにはなじみ深いものである。他にも，類似の機能を持つ表現として，「～の場合」がある（第1図)。これらの表現を用いる場合でも，その直前に来る語句によって，その直後に続く内容（副題に用いられている場合は主題の内容）に関する議論の妥当性が，地理的空間であれ観念的空間であれ，やはり一定の範囲に限定されていくことになる。

興味深いのは，空間的限定の機能を持ったこれらの表現（以下，便宜的にこれら三つをまとめて「空間的限定辞」と呼ぶ）が，相互に非常に高い互換性を持っているように見えることである。ほとんどの場合，例えば「x における y の地域的展開」という表題は，「y の地域的展開―x を事例として」と言い換えても，与える印象の違いはあるだろうが，言葉の意味上重大な違いが生じることはない。「～の場合」にしても事情は同じである。つまり，これらのいずれかを使用している発表は，ほとんどの場合，「y」を「x」という範囲に限定して論じているという観点から，「x における y」という表現に意味論上一元化できるのである。

また，「空間的限定辞」を用いる表題の圧倒的多数において，地名がそれらに先行している点にも注目すべきである[12]。「空間的限定辞」と地名の組み合わせを一度でも使用している発表表題は，第2図に示すように全体の4割を越える。また，第3図にあるように，地名は全ての表題のおよそ8割で用いられている。

既に指摘したように，学会発表表題は研究者の個人的研究史においても個々の研究テーマにおいても，研究成果を公表する最初の契機となることが多い。初学者が地理学界で最初に研究成果を公表するのは多くの場合学会での口頭発表であるし，初学者でなくても新しい研究テーマに関する成果を最初に公表する機会が学会発表であるケースは少なくない。そして，前者の場合であれば，初学者が既往の研究に付された表題を参照したり模倣したりすることが考えられるし，後者の場合ではそれに加えて発表者自身の過去の命名経験も一つの参照項となることが想定される。つまり，学会発表の表題はある研究成果に名前を付けるという人文地理学の一研究実践においてその実例として使用されており，この意味でまさにクーンの言う模範例を構成していると考えられるのである。そして第1図および第2図からは，「空間的限定辞」を地名とともに使用することが，人文地理学において発表表題を付ける際に，特に模範的な実例として受容されているということが窺える。つまり，地名と「～における」その他類似の表現との組み合わせを使用する表題は，日本の人文地理学における研究実践にとって重要な模範例なのである。中でも「～における」という表現が，最も典型的な学会発表表題の実例として，非常に高い頻度で使用されていると言えるだろう。

さらに，こうした傾向が生じるのは，われわれ人文地理学者が実践的にそれらを模倣したり一方的に教えられたりすることの結果である。すなわち，こうした傾向は，明示された合意に基づくルールによってではなく，われわれの暗黙の実践によって支えられているのである。仮にそれらの表題を採用すべき理由を明示することが可能であるとしても，われ

われはその理由を教わるゆえにそれらの表題を規範として受容するのではない。われわれがそれらを規範とすべき理由を考えるときには，既にしてわれわれの中でそれらの表題は人文地理学の典型として自明視され規範化されているのである。明らかにわれわれはこういった表題の付け方を，理由ではなく，訓練（discipline）に基づいて身につけている[13]。この点でも，地名と「～における」その他類似の表現との組み合わせは，クーンによる模範例という概念の含意に合致する。

ところで，こうした傾向には時代による差が存在するのだろうか。これを確認するために，A）表題に「～における」と地名との組み合わせが確認されるか否か，およびB）地名が表題に含まれるか否か，それぞれを発表がなされた年次ごとにクロス集計した。そして，このデータを元に時代を 10 年単位，20 年単位に区切った場合のデータについても再集計した。さらに同じ作業を，1960 年代以降のみのデータについても試みた。こうして得られた都合 12 通りのクロス集計にそれぞれ χ 二乗検定を施し，その有意水準を比較したのが第 1 表である。

一見して分かるとおり，多くのケースで有意確率は 0.05（5%）を超えており，このことは，「～における」等の表現や地名の使用頻度には時代による有意な差がないと見なすべきであることを示している。特に学会が成立してある程度の年数がたった 1960 年以降のみのデータで見ると，短期的・長期的いずれのスパンにおいても時代による使用頻度の違いには有意な差がみられない。このことから，「～における」等の表現や地名の使用は，世代間格差による長期的な変動や短期的な知的流行の影響などとは比較的無縁であると考えられる。こうした時間的な変動の少なさは，まさにクーンの言う「通常科学期」における「ルーティン・ワーク」の特徴に他ならない。このこともまた，「～における」などの表現や地名を使用することが，模範的な実例として日常的に反復されているという考えの妥当性を示している。

さて，ここまでの考察を簡単にまとめておこう。第一に人文地理学会の発表表題において地名と「～における」をはじめとする「空間的限定辞」とを組み合わせた表現が，少なく見積もっても 4 割以上の頻度で確認される[14]。第二に，こうした表現の使用頻度の高さは，明示的なルールによる規制よりもむしろ，われわれの暗黙の実践によって根本的に支えられている。第三に，この表現の使用頻度には時間的な変動がほとんど確認できず，傾向としては非常に安定している。以上の三点から，これらの表現の使用は，人文地理学会における一般研究発表において，典型的な模範例として機能していると結論づけられる。人文地理学関係の他の主要学会については検討していないが，主要学会間で会員が重複している場合が多い点を考えると，ここで導出した結論は日本の人文地理学全体にまである程度普遍化できると考えてよいだろう。

Ⅳ　地理行列再考
―人文地理学の形而上学的パラダイム

（1）模範例と形而上学的パラダイム

前章では，もっぱら模範例という観点からクーンのパラダイム論を下敷きにしつつ，人文地理学会の事例を検討してきた。これによって，ようやくわれわれが何を地理学的とみなしているのかを考える準備が整ったと言える。「～における」をはじめとして頻出傾向にある「空間的限定辞」と地名の組み合わせを人文地理学の模範例と考えた時，これと最も高い整合性を示す認識の枠組みはいかなるものであろうか。この認識の枠組みは，当然人文地理学において，クーンやマスターマンが形而上学的パラダイムと呼んだものの一部を構成している。そしてこれは，おそらく人文地理学らしさの識別とも密接に関わっている。では人文地理学における形而上学的パラダイムとは，いったい何であろうか。本稿のタイトルに示されているようにそれは「地理行列」であると筆者は考えるのだが，ここでは結論を急がず，そこへ到達するための準備作業として，まず模範例と形而上学的パラダイムとの関係を一般的なレベルで整理することにしたい。

少年ジョニーが父親に教えられながらハクチョウとガチョウとアヒルの区別を学ぶシーンで，クーンは個々の実例と対応規則との関係を，認識空間上に分布するハクチョウやガチョウやアヒルの間に線引きをすることと結びつけて論じている（クーン

1998: 400-413)。ここでは，個々の実例が点として表現されているのに対して，対応規則の方は線や面として表現されている。つまり両者の間には，「点」から「線」や「面」へという，いわば次元の飛躍が介在している。点の集合があくまで有限であるのに対して，線や面に包摂される点は無限であるので，個々の実例の集合をそのまま対応規則と同一視するわけにはいかない。ジョニーが出会うハクチョウやガチョウやアヒルの数は，言うまでもなく有限である。だが，ハクチョウやガチョウやアヒルを定義する対応規則は，ジョニーが出会わないようなハクチョウやガチョウやアヒル，あるいはこの三つ以外のものも包摂しうるものでなくてはならない。

ここでの事例において，点を構成する個々の実例と線および面からなる対応規則との関係は，模範例と形而上学的パラダイムとの関係と対応するものとみなすことができる。従って，形而上学的パラダイムとは，個々の模範例の集合をいわば積分したものとして立ち現れる高次の認識空間であると言うことができる。

注目すべきは，形而上学的パラダイムそれ自体はあくまで個々の模範例への接触を反復することで成立するにもかかわらず，逆にこの認識空間の方が模範例に先行するかのように「錯覚」されてしまうという構造を持っている点である。こうした事情は，加法の規則とクワス演算に関するクリプキ（1983）の有名な思考実験を参照することで，より鮮明になる。われわれは 1 + 1，2 + 3，5 + 7…など有限数の足し算を実行することを通じて，加法の規則を身につける。そして，今まで出会ったものより大きな値の数の組み合わせ—例えば 57 と 68—に関して足し算を実行するときも，われわれはおそらく 125 という答えをはじき出すだろう。だが，57 + 68 の答えは 5 であると強行に主張する者が現れたとき，ある困難に直面する。その人物は，われわれがそれまでに身につけ適用してきた規則は，実は「a も b もともに 56 以下であれば a⊕b = a + b，a か b いずれかが 56 より大ならば a⊕b = 5」なるクワスという名の演算であったのだと主張する。われわれはこの人物を容易に論駁することができない。なぜなら，57 と 68 というこの二つの数の組み合わせはわれわれが出会ったことがない未知の組み合わせであり，さらにこの人物の言うクワス演算のルールはそれまでわれわれがこなしてきた全ての有限の演算と矛盾なく整合するからである。

こうした懐疑論がいかに論駁困難であるとは言っても，やはりわれわれには何か説明しがたい納得のいかなさが残る。懐疑論が反駁しがたいものである以上，この納得のいかなさは，個々の演算と規則の関係に関するわれわれの「錯覚」の側から説明されざるを得ない。その「錯覚」とは，われわれは個々の演算に際して加法の規則を適用しているのだという考え，言い換えれば，個々の演算が従属すべき加法の規則を知っていてはじめて適切な演算が可能になるとする考えである。この考え方が錯覚であるとするならば，次のような考え方が成立するだろう。すなわち，個々の演算はほとんど無意識になされており，規則に従っているわけではない。むしろ規則よりもこの無意識性こそがスムーズな演算の遂行を可能にしているのである，と。規則の存在は，クワス演算の例のように，スムーズな演算の遂行が何らかの事情で妨げられたときに初めて，スムーズに事が進んでいたときにわれわれの実践を背後で支えていたかのように想起されるのである（永井 1991: 54-58, 99-105）。

こうした考え方をわれわれ自身の経験や実践に照らして考えることで，われわれは次のような教訓を引き出すことができる。それは，たとえ個々の演算に対応する規則が演算に先行して存在しているわけではないにしても，このことがわれわれの日常的な足し算の実践に深刻な困難をもたらすことはありそうにないということである。逆に，われわれの日常的な実践がまさに日常的であるからというだけで，それが何らかの普遍的な規則によって超越論的なレベルで保証されていると考える必要もない。そうであれば，規則は，われわれの日常的実践を保証したり支配したりするものというよりも，われわれの日常的な実践の全体を一種のパターンとして近似的に表現する手段として理解することができる[15]。

さて以上で，個々の日常的実践と規則との関係をいかに理解するかについて，クリプキの議論を起点としつつ，一定の知見にたどり着いた。元々クリプキの議論は，行為と規則のパラドクスに関するウィトゲンシュタインの洞察について論じる中で提示さ

れたものであるが，実は筆者がここでクリプキを持ち出したことは，全く恣意的な選択というわけでもない。というのは，クーンの著書には，クリプキが注目したウィトゲンシュタインの視点をクーンもまた意識していたと思われる箇所が見受けられるからである（クーン 1971: 48-57, クーン 1998: xviii-xix, 野家 1998: 156-157 などを参照されたい）。

したがって，形而上学的パラダイムと模範例の関係に関しても，次のように理解しておくことが可能である。われわれがある分野において日常的な研究実践を安定的に営んでいるからといって，必ずしもそこに支配的な単一の形而上学的パラダイムが先験的に存在するとは限らない。しかし，日常的な研究実践が安定的に営まれているのであれば，そこで反復されている実践のパターンに整合的な形而上学的パラダイムを，いわば日々反復される日常的研究実践の集合を近似的かつ象徴的に表現したものとして，提示することは可能であろう。そして，そうした近似が原理的には無数に提示可能であるにしても，模範例を通じた日常的研究実践の反復が安定的である度合いに応じて，われわれの模範例に対してより整合的であると考えられる形而上学的パラダイムも，自ずと限定されてくると思われる（クーン 1998: 365-370 を参照されたい）。

こうした観点を十分念頭に置いた上で，次節では，前章の議論で明らかにされた人文地理学の模範例から，いかにして形而上学的パラダイムとしての地理行列が成立するかについて考察する。あわせて，形而上学的パラダイムとしての地理行列と，人文地理学内で常識的に前提とされるさまざまな考え方との整合性についても検討してみたい。

（2）形而上学的パラダイムとしての地理行列

日本の人文地理学に即して地名および「～における」等の表現を用いた表題を個々の模範例と考えた場合，その集合から積分される形而上学的パラダイムはいかなるものであろうか。

「x における y」という形式の表題の積み重ねによって，「における」の直前に続く項と直後に続く項それぞれからなる二つの集合が形成される。だが，既に指摘したように，x の位置にはほとんどの場合地名が入る。逆に，y の位置に地名が入ることはまずない。つまり，個々の x からなる集合 X の構成要素と個々の y からなる集合 Y の構成要素が重複することは，地名に関する限りはまず皆無であると言える。

互いの要素が重なり合うことのない二つの集合 X と Y。それらを組み合わせることで，そこに一つの表ができあがる。表の X 軸に並ぶのは，地名である。こうしてできあがる一つの表こそ，われわれ地理学者にはなじみ深い地理行列（geographic matrix）である。

地理行列とは，行方向には地表空間を分割したユニットを，列方向にはそれぞれのユニットを特徴づける自然・人文・社会現象などを配置した行列のことである。もちろん，地理行列はあくまで理念的な図式であって，すべての行や列やセルが何らかの値で埋められている必要はない。前節までの議論に即して考えてみても，地理行列は具体的に存在している「x における y」という表題の積分として抽出されるのであるから，線や面が無限の点を含むのと同様，現に存在している研究の表題だけではなく可能性として存在しうる研究の表題をも含むものでなければならない。

このためには，地理行列の中に常に満たされない領域があることが保証されていなければならないが，この条件は以下の四つの理由によって満たされることになる。一つは，自然・人文・社会現象の共時的なカテゴリー分けが単一ではあり得ないこと，二つ目は空間の分割が分割する主体によって多様であり得ること（これは，さらに同一スケール内での線引きの多様性と，分割するスケールそれ自体をめぐる多様性とに分けて論じられるかもしれない），三つ目は，分割された地表空間に与えられる地名もまた与える主体によって多様でありうること，そして最後に四つ目は，これらの区分が例え固定されたとしても，その通事的な変化や多様性をいつでも問題にしうること，以上である。こうして地理行列の中に満たされない領域が常に存在していることこそが，未だなされていないが将来になされるかもしれない研究の居場所を保証していると言える。

地理行列は，実際にわれわれ日本の人文地理学者が研究を遂行する上で自明視しているさまざまな事柄と密接に関係している。例えば，非公式の場で，人文地理学のメルクマール，あるいはアイデンティ

ティの根拠は地図であるということがよく言われる。あるいは，より過激な場合，地図のない論文は地理学の論文ではないと言われることもある。言うまでもなくこの地図とは主題図のことであるが，「主題図」と言うときの「主題」とは，先の集合Yに含まれる要素であり，地理行列の列方向に配置される要素に他ならない。それが地図として表現されるということは，すなわち，その主題が特定のスケールにおいて地表空間を分割した一切片に位置づけられて理解されていることを意味する。そして，この地表空間上の一切片には，多くの場合，地名が付けられている。このことから，地図（主題図）を人文地理学のメルクマールとみなす言説が現に有意味なものとして流通しているということは，地理行列という認識の枠組みが人文地理学を特徴づける重要な要素であることと整合性を有している。このような言説が有意味なものとして機能している範囲こそが人文地理学の形而上学的パラダイムが支配的である範囲，すなわちクーンの言う科学者集団という意味での「人文地理学者集団」に他ならない。

また，理論的研究と事例研究の二分法も，地理行列と無関係ではない。ある研究が事例研究であるためには，その研究の対象が何らかの意味で個別性や特殊性を帯びたものである必要がある。この条件を手っ取り早く満たす手段は，固有名を持つ存在者を研究の対象に据えることである。しかし，ある研究が単なる事例研究ではなく人文地理学の事例研究であるためには，この条件だけでは不十分である。というのは，その固有名が単に人物や組織や出来事などを指示するものならば，それだけではその研究は地理学的であるとみなされにくいと思われるからである。同じ内容の研究であれば，固有名としての地名を含む研究の方が，そうでない研究よりも地理学的な研究とみなされやすいだろう。

ここでの論点をより明確にするために，次のような場合を考えてみたい。ある初学者が，Aという地域でBという会社の事業展開の実態を調査したとしよう。この人物はすでに論文を書き上げているが，表題をまだ付けていない。この研究に付されるであろう表題のパターンはさまざまなものが考えられる。「Aにおける○○事業の展開」，「Bにみる○○事業の展開過程」，「○○事業の展開過程―Aを事例として」，「○○事業の展開過程―Bを事例として」，…。さて，この人物がこの論文を地理学の論文としてしかるべきところへ提出することになったとしたら，人文地理学者はどのようなアドバイスをするだろうか。論文の内容について詳しく議論する余裕がなく，タイトルの付け方のみを相談された場合であれば，おおかたの人文地理学者は，たとえ内容的にはそれが一番ふさわしいとしてもBを含んでAを含まない表題は勧めないのではないかと思われる。つまり，このような研究を人文地理学の事例研究らしく見せる最も手短な手段が，それが地域であれ空間であれ場所であれ，固有名としての地名によって名指される存在者との関係でこれらの対象を論じる（かのような表題をつける）ことだと考えられる。「～を事例に」という副題がかなりの割合で地名とともに使用されているという事実（第1図）も，このことを象徴している。

こうしたことから，ある研究が地理学の事例研究とみなされるための要件として，固有名としての地名によって，地理行列内における行の位置が特定されていること，という条件が想定される。例えば，少なからぬ学会発表表題で，知名度の低そうな小スケールの地名が，よりスケールの大きな範囲を示す知名度の高い地名と組み合わせて用いられている（○○県□□地域，○○国□□地方など）のも，このことと無関係ではないと思われる。このような傾向は，スケールの大きな方の地域が当該の研究内容と重要な関わりを持っているためだけでなく，その研究がどこの地域を扱っている研究か，言い換えれば地理行列上のどこに位置づけられるのかに関する情報を与えるための配慮とも考えられるからである[16]。

他方，人文地理学における理論的な研究は，固有名を持つ存在者のみを考察の対象としないことはもちろんであるが，そこで一般的に論じられていることがらが「地域」や「空間的」，あるいは「場所」の問題などに関するものであることが要請される。ここで言う「地域」や「空間」，「場所」などの言葉が，固有名としての地名によって名指される存在者を要素とする集合に付された一般名であることは重要である。つまり，人文地理学において事例研究に対して理論的研究とみなされるものは，事例研究とは逆

に行が特定の位置に固定されないが，他方では可能な限り多くの行に当てはめても妥当性を失わない議論であることを要件とする傾向がある。いずれにせよ，他の条件において等しいならば，事例研究であれ理論研究であれ，地理行列の中に位置づけにくい表題を持つ研究は，容易に位置づけられる研究と比べて，地理学的ではないとみなされやすい傾向にあると言えるのではないだろうか。

さて，ここで第一章の問いに戻ろう。地理学の思考の枠組みの中心にあるものは何だろうか。われわれが実践的に認識している地理学らしさとは何だろうか。そして地理学とは何だろうか。ここまでの考察だけから判断するならば，われわれはこれらの問いに対して，次のように答えることになるだろう。地理学の思考の枠組みの中心は地理行列であり，われわれの認識する地理学らしさとは，その研究が地理行列に無理なく位置づけられうるということであり，地理学とはある現象を地名との組み合わせによって認識する知の総称である，と[17]。

ところで，地理行列を人文地理学の形而上学的パラダイム，ないしはそれに類するものとみなした研究の嚆矢は Berry（1964）である[18]。Berry（1964）は地理行列を，伝統的な個別性志向の地誌学的研究と，計量的手法を用い科学的たることを志向した新しい地理学とを統合する認識枠組みとして提示した。われわれ人文地理学者が地理行列という言葉を最初に教わる時には，ほとんどの場合ベリーの論考とともに教えられると言ってよい。しかし，少なくともそれを綜合（synthesis）と表現した限りにおいて，ベリーにとって地理行列とはそれが模範例であれ形而上学的であれ現に存在しているパラダイムではなく，あくまで実現されるべき仮説（thesis）であった。とはいえ，人文地理学を統合する視点として地理行列を捉えたことは，おそらくベリーが自覚していたよりもはるかに正鵠を射た認識だったと言わざるを得ない。なぜなら，少なくとも日本において，ベリーが意図していた計量地理学と伝統的地誌学のみならず，マルクス主義的アプローチや人文主義的アプローチを経てフェミニズムやポストモダニズムに至るまで，その後登場した数々のアプローチさえもが，この地理行列という枠組みの中で見事に併存しているように思えるからである。人文地理学会の中には計量的なアプローチをする地理学者もいれば，マルクス主義的なアプローチや人文主義的なアプローチを採用する研究者もいるし，ポストモダニストを自称する論者や地誌学的な研究を志向する者もいる。そうした研究者が形成する社会集団において生産される知的労働の成果が最も首尾良く位置づけられる認識空間，それが地理行列なのである[19]。

Ⅴ むすび

本稿では，クーンのパラダイム論を模範例という観点から再検討し，その典型的な事例として人文地理学会の学会発表表題に頻出する「～における」などの表現に着目した。さらに，これを踏まえて，人文地理学の形而上学的パラダイムが地理行列である可能性を明らかにした。しかし，形而上学的パラダイムはあたかもわれわれの行為を規制しているかのようにみえるものとして，あくまで事後的に構成されるものである。われわれが地理学的なものとそうでないものとを識別するときに依拠するのは，あくまで過去のよく似た事例との間にある類似性であり，地理行列のような先験的な枠組みではない。形而上学的パラダイムとしての地理行列とは，現に存在している人文地理学研究の総体を近似的に表現した，いわば人文地理学の似顔絵のようなものなのである（しかも本稿の文脈に限って言えば，学会発表のみを分析対象としているという限界を抱えた上での似顔絵にすぎない）。

もちろん，こうした結論は「地理学とは何か」という問いへの最終的な解ではなく，この問いをめぐってさらに深く考え議論するための便宜的な出発点にすぎない。例えば，地名をカテゴリー化の機能という観点から一般名と連続的なものとして理解しうるという大平（2002）の考察は，地理行列の一方の軸に配置される要素，つまり地名を，ひとまず一般名とは異なる固有名と理解して論を進めた本稿との間に，直ちに興味深い問題を引き起こすように思われる。また，最新の GIS 研究が断片化した人文地理学の関心に求心的な核を与えるとともに，科学全体の勢力地図を書き換える勢いでその関心領域を拡張しうると主張するオープンショー（2002）も，GIS

の認識枠組みと地理行列の認識枠組みの親和性を考慮すれば，本稿の関心からも非常に興味深い議論であると言えるだろう。以上は本稿の後に展開しうる議論のほんの一例であるが，実際に本稿の結論をどう受け止め，どういった議論に接続していくかについては，読者の判断にゆだねたい。

ところで，こうした本稿の結論をめぐって，いくらか補足しておくべき事がある。

第一に，もし地理行列がそれとして客観的に存在する規則ではなく，筆者によって近似的に表現されたものであるとするならば，なぜ筆者がそのようなものをわざわざ再構成したのか，という問題が残る。しかも，地理行列が地理学のパラダイムであるという結論は，「系統地理学と地誌学」という地理学者には自明の二分法を焼き直しただけのようにも見えるかも知れない。筆者はなぜ，わざわざこのようなことを明らかにしたのか。それは，従来の人文地理学において，パラダイムという概念をわれわれ自身の経験的な営みと適切に結びつけることができていなかったために，パラダイムという概念およびわれわれの経験的営み双方への理解が深められていないと感じたからである。「人文地理学が多様性を持った学問である」ということは，さまざまな場面で強調されることであるが，この言明が真であるならば，人文地理学が端的にカオスであってはならず，人文地理学の意味について相対的に安定した核を見いだすことが可能なはずである。そうした意味で，公的／私的を問わずあらゆる場面で安易に反復される，人文地理学の多様性のみを無邪気に語る（反面で，ではその「人文地理学」とはいったい何であるのかを真摯に問おうとしない）言説に対して，筆者は違和感を覚える。もちろん，これらの違和感は冒頭で述べた「満足できなさ」の裏返しでもある。パラダイムと地理行列を結びつけて論じた本稿の議論は，こうした違和感や満足できなさに駆り立てられた筆者なりの問題提起の一環に他ならない。

二点目は，こうした結論を導き出すに至った筆者の観察それ自体が，人文地理学の教育を通じて筆者が身につけたさまざまな暗黙知を既にして前提にしている，という点である。例えば，ある地名を一般名や他の固有名ではなくまさに地名として筆者が認識しうるのは，義務教育から大学院教育に至る地理教育の制度内で筆者がそれをほとんど無意識的に地名として認識するよう訓練されてきたからである。こうした観点からすれば，単に「～における」という表現に地名が先行する表題が多いというだけでなく，まさに「～における」という表現に後続されることで先行の単語が地名として認識されている可能性がある点も見落とせない。このように，本稿の結論を導き出すための議論の前提に，本稿の結論が部分的に先取りされているということは避けがたく，本稿の議論が完全に客観的な外部観察によってもたらされているとは言えない。「人文地理学とは何か」という問いは，多少なりともその内部で専門的な訓練を積んできた筆者にとっては，常に自己へと向かう再帰的な問いである他はない。本稿の意義は，このような事情も加味した上で検討される必要がある。

最後に三点目であるが，以上のような問題意識から人文地理学のパラダイム（それが模範例であれ形而上学的なものであれ）を明らかにすることだけが当面筆者の目指したところであり，明かされたパラダイムを維持したり，あるいは変革したりする作業が第一義的な目的ではないということである。本稿で明らかにした人文地理学のパラダイムを筆者は擁護したいのか，それとも批判し変革したいのか，という疑問を抱く読者もいるだろうが，こうした問題設定は本稿の関心外である。筆者は，この世界にとにもかくにも人文地理学と呼ばれる営みが存在する以上，人文地理学とはいかなるものかを考えることを通じてこの世界の一端をより深く理解することが可能なはずだと考えている。そして，この世界をよりよく知るという営みは，この世界をより良いものに変える営みとは独立に，ある種の価値を持っている。本稿が目指したのはそういった価値である（ネーゲル 1989: ix-x を参照）。

とはいえ，人文地理学のパラダイムを維持したり変えたりすることに関して，何も言うべき事がないわけでもない。最後に今一度クーンを参照しつつ，この点に若干言及しておこう。

クーン（1998: 122-127）は，パラダイムが革命的変化を遂げる際に伝統と革新との間にパラドキシカルな緊張関係が生じると示唆している。例えば，コペルニクスが地動説を唱えた際，彼は天体の一様な円運動というアリストテレス以来の伝統的規範に固

執し，それを地球に対して適用したのであり，そこで過去天動説において規範とされていたことが全て放棄されたわけではない。徹底的な革新は，部分的には伝統への徹底的な内在によってももたらされているのである（野家 1998: 122-127）。

人文地理学のパラダイムが維持される時はもちろんのこと，たとえそれが変革されるとしても，そのプロセスには既存の人文地理学に対する徹底したこだわりが逆説的に見いだされるに違いない。「～における」という形式の学会発表表題や地理行列も，疑いなくそうした専門母型の一部を形成している。地理行列という認識枠組みを否定するのではなく，逆に徹底的にこだわることで，かえって革新的で創造的な転換が図られる可能性もあるのだ。

もちろん，地理行列だけがそうしたパラダイムを構成しているわけではないし，別のパラダイムの存在が今後明らかにされる可能性もあるだろう。だが，いずれにせよ，ある研究者の知的労働が人文地理学の成果として生産的であるためには，その人物が人文地理学のパラダイムが何であるのかを心得ている必要があることに変わりはない。そして，人文地理学のパラダイムが何であるかを理解することは，人文地理学が何であるかという冒頭の問いに向き合うことを通じて達成されるものであろう。したがって，人文地理学とは何かという問いが自己の内にわずかでも存在するのなら，その問いを放棄せずに徹底してこだわることこそが，われわれの営みが人文地理学として真に創造的で魅力的であるための条件であるようにも思えるのである。

謝辞

本稿の一部は，2004 年の人文地理学会大会にて口頭発表し，その際山田誠氏（京都大学）および熊谷圭知氏（お茶の水女子大学）より示唆に富むコメントを頂いた。また本稿は，雑誌『人文地理』に掲載不可とされた原稿を元に加筆修正したものであるが，人文地理学会の編集委員会からは，掲載不可にもかかわらず丁寧かつ興味深いコメントを多数頂き，それらの一部は本稿に直接反映させて頂いた。さらに，加藤政洋氏（立命館大学），若松司氏（大阪市立大学・院）のお二人からも草稿の段階で貴重な助言を頂いた他，Tim Reiffenstein 氏（マウントアリソン大学）には英文要旨を校閲して頂いた。本稿の議論の不備はあくまで筆者の責任であることをお断りした上で，以上の方々に記して感謝させて頂きます。

最後に，僭越ながら，2005 年お亡くなりになられた浮田典良先生・竹内啓一先生・丹羽弘一氏に本稿を捧げるとともに，謹んでご冥福をお祈りさせていただきます。

注

1）このことは，本稿が地理学の学術論文としては全く無意味である可能性を示唆している。学術論文とは，本来，当該分野の既存の成果との関係においてその意義や独創性が明確に整理されている必要があるからである。しかし，筆者の関心は，地理学内部での本稿の位置づけではなく，あくまでこの世界における地理学（あるいは本稿）それ自体の位置づけにある。したがって，本稿の価値は，さしあたって，学術論文としての価値とは独立した次元にあるという前提で議論を進めたい。

2）ただし，本稿では日本の人文地理学の事例のみしか検討しない。したがって，海外の人文地理学に対して本稿の結論を無批判に適用することはできない。その理由については，後に II（2）で述べる。

3）なお，クーン（1971）において exemplar は見本例と訳されている。

4）以上，クーンの論考における「パラダイム」や「専門母型」などの概念をめぐる顛末に関しては，野家（1998: 214-223）を参照されたい。ただし，クーン自身は，専門母型の要素を三つに分けて説明していることもある（クーン 1998: 383-384）。いずれにしても重要なのは，模範例としてのパラダイムと，それ以外（特に形而上学的パラダイム）との概念上の区別である。

5）「この本（＊引用者注: クーン 1971.『科学革命の構造』）の中で『パラダイム』という用語は，物理的にも論理的にも『科学者集団』という語句の近くに登場する。…パラダイムとは，科学者集団の成員たちが共有しているもの，しかも，彼らだけが共有しているものである」（クーン 1998: 381）。こうした意味で，科学哲学としてのクーンのパラダイム論は，19 世紀半ば以降に専門職業集団化した科学を特に念頭に置いていると考えられる。しかし，パラダイムという語に託された模範例，概念図式などの諸概念は，クーンの科学史研究において，この時代に限らず用いられている汎用性の高い概念であった。

6）とりわけ模範例と科学者集団との循環論的関係はクーン自身がはっきりと指摘している（クーン 1998: 199）。

7）われわれは自転車に乗る方法を言語によって説明できなくとも，自転車に乗ることができる。しかし，自転車に乗ることができる（自転車の乗り方を知る）ためには，一定程度の訓練が必要である。科学的知識においても，このような形での技能の習得が存在しうるのである。

8）クーン自身が，こうした概念図式の転換について，自ら

のアリストテレス読解における根本的転換の体験を具体例として持ちだしているが，それはいささか偶然的要素の強い出来事として記述されている（クーン 1998: viii-ix）。

9）野家（1998）に従う限り，パラダイム＝支配的なものの見方という認識は人文地理学のみに限られない。しかし，クーンが教科書や学術雑誌などを模範例と見なしていたことを考慮すれば，パラダイム＝支配的なものの見方という認識が誤解であることが，クーンについて語る教科書（例えば，ジョンストン 1997，1999）や学術誌掲載論文（例えば，野澤 1992）を通じてあまり強調されてこなかったという人文地理学に固有の事情も見落とせない。

10）ただし，科学の発展の説明図式としてのクーン・モデル（前パラダイム期→パラダイム成立→通常科学期→危機→科学革命→新パラダイム形成→通常科学期というサイクルでの断続的変化）に関しては，社会科学への適応可能性についての判断は保留せざるを得ない。というのは，社会学的知識が専門的社会科学の範囲を超えて日常の実践に再参入していくという近代社会に特有の条件を考慮すれば（Giddens 1991，ギデンズ 1993 参照），社会科学に根本的なパラダイム転換が起こるのは，近代社会そのものが革命的な変化を被るときであらざるをえないと考えられるからである。そういった革命的変化が近代社会に起こっているのかどうか（あるいは既に起こったのかどうか）は，まさに今近代社会の中で生きている筆者には，直ちには判断しかねる。

11）本稿が対象としたのは，1952 年から 2003 年までの期間に人文地理学会大会の一般研究発表の枠で発表された研究の表題である（ただし，1960 年はシンポジウム報告のみであったため，除外した）。本稿で使用した全ての図表は，上記各年の雑誌『人文地理』各号に掲載の大会プラグラムを元に筆者が編集した，一般研究発表の一覧表を元に作成した。なお，この一覧表は，以下の URL にて公開されている。http：// www . venus . sannet . ne . jp / geophil / works / titles . xls （2006 年 5 月現在）。

12）ただし，歴史地理学の分野で「～における」という表現が用いられる場合は，地名よりも時代区分を示す言葉が先行するケースが多い。この点で，日本において歴史地理学は他の下位分野とは相対的に独立した規範を保持していたと言いうる。

13）日本地理学会の投稿規定には，かつて「～における」や「～の場合」という表題に関する規定事項が存在していたという（本稿の元となる内容を 2004 年の人文地理学会大会で口頭発表した際，山田誠氏により指摘を受けた）。しかし，これらが学会のルールとして明示的に定められている場合でも，むしろそうした規定の方こそが，ここで筆者が指摘したような訓練のプロセスや暗黙の実践を前提に成立している点に留意する必要がある。

14）ここまでで取り上げた以外に，意味論上明らかに「空間的限定辞」を用いた表現に変換可能な表題が数多く存在する（例えば，「北海道の農業」，「カナダの都市システム」などといった表題）。また，たとえ文脈的には特定の地域の事例研究であることが特定できる場合でも，地名が含まれていない表題も多い（例えば，地名を含まないものとしてカウントした表題の中には，日本国内の事例研究と容易に想像できるものが少なくない）。さらに，地名か否か判断しかねる固有名を含む表題も散見された。ここでの集計には，これらはいずれも含まれていない。したがって，この集計結果とそれに基づく結論は，過小評価された数値から導かれた控えめなものであることを強調しておきたい。

15）しかし反面で，あらゆる行為は，先験的に存在しているかのようにみえる規則に則ったものとして事後的に規則に回収されることで，初めて有意味な行為として経験されるという側面もある。行為と規則の関係，したがって模範例と形而上学的パラダイムの関係にはこうした二面性があることに留意する必要がある。

16）さらに追究するならば，ある地名が，同一スケールに併存するものであれ上位スケールや下位スケールに属するものであれ，他の地名との関係において地理行列内での位置づけを与えられるのでなければ，その研究は地理学の研究としては理解不可能になるということもできる（ある意味では地理学者にとっては当然のことであるが）。これは，架空の場所に関する地理的書物が地理学の書物として現実に受け入れられるかどうかということを考えてみれば，容易に想像できる。

17）ここまでの考察だけから判断しないのであれば，当然本稿の結論にはさまざまな反論が可能であるし，地理行列よりも強力な概念図式をよりパラダイムと呼ぶにふさわしいものとして提出できるかもしれない。その意味で，本稿は地理行列のみが単一の形而上学的パラダイムであるという結論に対しては態度を保留する。しかし，地理行列と親和性の高い表題の付け方が多いということは本稿で示したデータによって明らかであるにもかかわらず，従来そのことが人文地理学のパラダイムと結びつけて論じられることが全くなかったということは強調されて良いだろう。本稿の結論が，地理行列以外の何かをより妥当な形而上学的パラダイムと考える別の議論によって反駁されるとするならば，そうした議論は当然，本稿で明らかにした発表表題の諸特徴を本稿以上に首尾良く説明してくれるものでなければならない。

18）ただし，Berry（1964）の地理行列では，行と列の構成要素が今日われわれが想像する地理行列の逆になっており，空間的ユニットは行ではなく列を構成するものとされている。

19）20 世紀末の人文地理学を特徴づける諸言説を地図化していくときに見落とせないのが，社会理論やポストモダニズムなどを背景として人文地理学が多様性を孕んだ分野であることを謳う言説と，地図やフィールドワーク，

空間分析などを人文地理学の核に位置づけようとする言説などとの間に生じた対立関係である。この対立関係は日本国内でも（とりわけ 1990 年代以降）世代間の差異や地域間の差異などに変奏されつつ方々で反復されていた。しかしながら，それらがまさに地理学史上の出来事と理解される限りにおいて，この二者の間には本当の意味での対立関係は存在しなかったと筆者は考えている。人文地理学が多様性を孕んだ分野であるという言説は今日なお頻繁に目にするが，その実態は地理行列という認識枠組みの内部での多様性でしかないように思われる。

参考文献

Berry, B. J. L. 1964. Approaches to regional analysis: a synthesis. *Annals of the Association of American Geographers* 54: 2-11.

Giddens, A. 1991. *Modernity and self-identity: self and society in the late modern age*. Stanford: Stanford University Press.

ギデンズ，A. 著，松尾精文・小幡正敏訳 1993.『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結』而立書房.

Johnston, R. J., 1978. Paradigms and revolution or evolution? Observations on human geography since the Second World War. *Progress in Human Geography* 2. 189-206.

ジョンストン, R. J. 著，立岡裕士訳 1997.『現代地理学の潮流 ：戦後の米・英人文地理学説史（上)』地人書房.

ジョンストン, R. J. 著，立岡裕士訳 1999.『現代地理学の潮流 ：戦後の米・英人文地理学説史（下)』地人書房.

クリプキ，S. A. 著，黒崎宏訳 1983.『ウィトゲンシュタインのパラドックス―規則・私的言語・他人の心』産業図書.

クーン，T. 著，中山茂訳 1971.『科学革命の構造』みすず書房.

クーン，T. 著，安孫子誠也・佐野正博訳 1998.『科学革命における本質的緊張―トーマス・クーン論文集』みすず書房.

ラカトシュ, I.・マスグレーヴ, A. 著, 森博監訳 1985.『批判と知識の成長』木鐸社.

Mair, A. 1986. Thomas Kuhn and understanding geography. *Progress in Human Geography* 10. 345-369.

マスターマン, M. 1985. パラダイムの本質.『批判と知識の成長』I.ラカトシュ・A.マスグレーヴ著，森博監訳 木鐸社: 87-130.

永井均 1991.『<魂>に対する態度』勁草書房.

ネーゲル，Th. 著，永井均訳 1989.『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房.

野家啓一 1998.『クーン―パラダイム（現代思想の冒険者たち 第 24 巻)』講談社.

野澤秀樹 1992. 地理学史研究の方法―科学哲学・科学史・思想史との係わりにおいて. 人文地理 44: 47-67.

大平晃久 2002. カテゴリー化の能力と地名. 地理学評論 75: 121-138.

オープンショー, S. 著，森田匡俊・池口明子訳 2002. 地理学における GIS 危機への一考察，あるいはハンプティダンプティを元に戻すための GIS の利用について. 空間・社会・地理思想 7：40-47.

ポラニー，M. 著，佐藤敬三訳 1980.『暗黙知の次元―言語から非言語へ』紀伊国屋書店.

Abstract

What is geography?

This question is at the core of the discipline. Without reference to any specific context it appears vague and abstract. Almost all geographers confront this problem unconsciously yet (perhaps) choose to neglect its relevance in their every day research practices. However, few geographers would deny this question's fundamental importance. I am one such geographer, and the aim of this essay is to reflect on the above question in the context of Japanese human geography.

The author first develops an analytical framework that re-examines Thomas Kuhn's discussion on paradigms and exemplars. By paradigm, Kuhn did not merely imply a conceptualization for metaphysical framework as evoked by such phrases as "worldview" or "cosmology". Instead, Kuhn's intention was to ground the idea of paradigms in the concrete and material. Thus, textbooks, refereed papers, and associated practices represent the types of paradigm as normative examples for a specific discipline that Kuhn had in mind. However, this crucial aspect of his discussion has been overlooked due to the semantic confusion attached to the use of paradigm. In response to his situation, Kuhn sought greater clarity through the use of a new term "exemplar" to distinguish the material trappings of paradigms from the metaphysical context in which they are situated.

Unfortunately, for several reasons, discussions of Kuhn in Japanese human geography have largely neglected both the substantive and subtle aspects of these arguments. The result was such understandings of Kuhn as follows. First, though the idea of paradigms works in the case of the natural sciences, it is thought inapplicable to the social sciences, including human geography. Second, disciplines in the social sciences

contain multiple and often competing currents of thought, rather than a single prominent paradigm. However, once we draw upon the diverse wealth of textbooks, refereed papers, classical writings, scientific societies and so on, no matter what kind of science human geography is to be, these various manifestations of "paradigm as exemplar" enables us to consider deeply all the aspects of our activities as intellectual professionals. In other words, even though human geography lies beyond the fold of the natural sciences which Kuhn was explicitly addressing, through his concept of paradigms as exemplar, we can begin to make use of his theories to descript characteristics of human geography.

With this broader conceptualization in mind, the following chapter proposes more concrete analysis of paradigm as exemplar in human geography. Given that Kuhn understood not only textbooks and classical writings but also journals and periodicals as normative exemplars for scientists, we can say that titles of presentations at academic conferences serve as a key set of exemplars with which to gauge Japanese human geography. The reason for this is that in our daily research practices, we use, cite and repeat the titles of presentation and thereby provide a name for the research programs that we consciously and unconsciously prosecute.

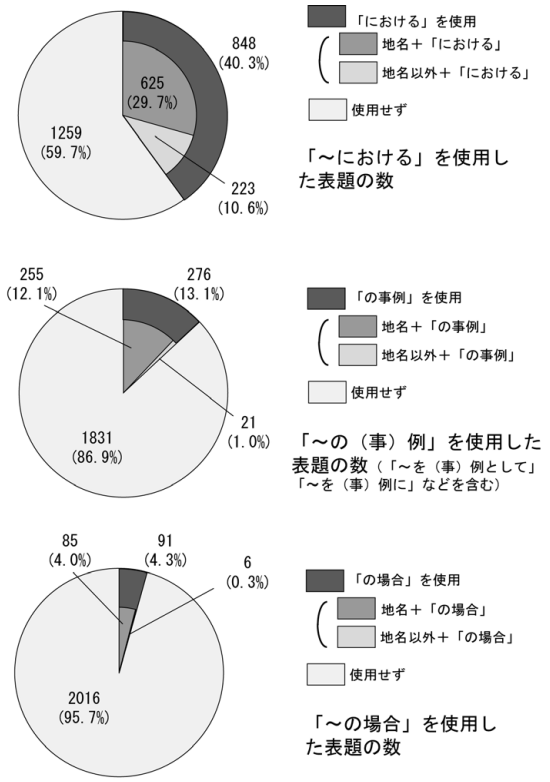
By examining all of the titles of presentation in past annual meetings of The Human Geographical Society of Japan (*Jimbun Chiri Gakkai*), it is possible to see a high frequency of the expression "x *ni okeru* y" - y in x. Similarly, we can also recognize other similar expressions, like "y: x *wo jire ni*" – y: a case study of x – and "y: x *no baai*" – y: a case of x – which spatially restrict a specific subject denoted by "y" to a certain area "x". From the standpoint I mentioned beforehand, these typical expressions can be thought of as parts of our exemplars. Indeed, for two reasons these expressions outline, to some degree, the range of our ideas that govern the set of research practice associated with writing articles and books, as well as presenting our findings orally. First, an oral presentation is usually the first opportunity to give a title to our research product, while the titles of papers and books further reflect this process. Second, as an empirical fact, we imitate such titles in the past as literal "exemplars" when we learn to make a presentation or write a report in the geographical education system so that we can easily give a title to our research products using these expressions without any conscious reflection about their normative characteristics.

In the next chapter we consider theoretically what kind of paradigm as metaphysical framework can be formed from the paradigms as exemplar and how they are brought about in Japanese human geography, based on the arguments in the preceding chapter. With reference to the "quus" operation proposed by Kripke, I outline the process in which individual practices are integrated into rules as if the latter dominates the former.

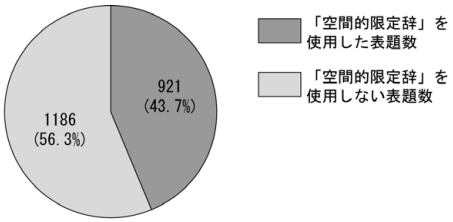
In our case, Kripke's formulation enables us to consider that the use of expressions such as "x *ni okeru* y" can be regarded in the same light with specific calculating practices, while metaphysical paradigm corresponds with the notion of rules. Then, I propose the hypothesis that the metaphysical paradigm in Japanese human geography, as evidenced by the subjective frequency of titles with "x *ni okeru* y", can be integrated figuratively as a geographic matrix. This matrix is composed by charting the correspondence between the relative positions of the two categories "x" and "y".

Finally, following from the proposition that a geographic matrix is at least one way of evaluating the core(s) of human geographical thought in Japan, I propose several directions for further inquiry. By going further from the findings of this paper, we might be able to arrive at an alternate viewpoint of our research practices formulated around the "geographic matrix paradigm" and hence open up new realms of intellectual territory for further examination. I believe that through such reflection we can better understand the characteristics of our discipline. It is also, at the same time, a contribution to improve our understanding of the world better, so far as geographer's knowledge and activity should be considered as parts of phenomena that comprise of the world.

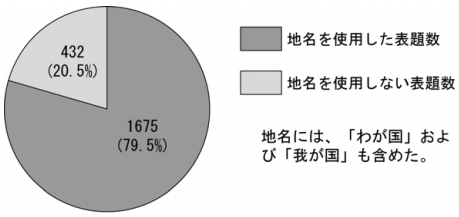
Keywords: human geography, T. Kuhn, exemplar, paradigm, titles of presentation, geographic matrix



第1図　人文地理学会大会の発表表題における「～における」、「～の事例」および「～の場合」の使用状況
（雑誌『人文地理』の4～11と13～55の各号に掲載の大会プラグラムを元に筆者が作成。これ以降の図表も同様）
Fig1. Titles of presentation using "X *ni okeru*"(in X) , "X *no jirei*"(a case study of X) and "X *no baai*"(a case of X) in the



第2図　発表表題における「空間的限定辞」の使用状況（筆者作成）
Fig2. Using of the "expressions for spatial restriction" in the titles of presentation



第3図　発表表題における地名の使用状況（筆者作成）
Fig2. Using of geographical names in the titles of presentation

第1表　発表年代と「～における」および地名の使用頻度とのクロス集計
Table 1. Cross tabulation of date of presentation with frequency in use of "X *ni okeru*" and geographical names

発表年代	χ二乗検定の漸近有意確率（両側）			
	～における		地名	
	全期間	1960年以降	全期間	1960年以降
一年ごと	0.052	0.276	0.099	0.192
十年ごと*	0.003	0.120	0.267	0.293
二十年ごと**	0.001	0.120	0.136	0.118

＊発表年を十年分ごとで再集計した後、クロス集計

**発表年を二十年分ごとで再集計した後、クロス集計